

意味は？

また、上部構造の緩衝はどの程度が適切か？

**回 答** 村瀬博文（口腔外科II）

症例においてOリングを使用しているためにアームをつけましたが、その意味は補綴物の横ゆれ防止のためですが、本学でおこなっているバイオトロンRを

使用することによりアームの必要性はなくなると思われます。

**回 答** 田中 収（補綴II）

アームは隣在天然歯との間の食片圧入防止の目的もある。

上部構造の緩衝量と構造は今後検討していきたい。

### 30. 箔着陶材冠のブリッジへの応用

坂口邦彦，越智守生，田中 隆\*  
（補綴II，附属病院技工部\*）

純金および貴金属合金の2層から成るフォイル「フレクソフォイル」と、ポーセレン・貴金属の溶着材「フレクソボンド」とから構成されているフレクソボンドシステムが歯冠修復材料として、新しく開発された。このものは、審美性が最も要求される前歯部や小臼歯部に適しており、優れた審美修復が行えるばかりでなく、生物学的に良好な適合を達成できるものである。さらに自家硬化性のフォイルがポーセレンと強固に溶着するだけでなく、フォイルがポーセレンに圧縮強度を与える機構であるため、十分に強化されたポーセレンクラウンを作製できる。

そこで、フォイルとポーセレンの溶着強度を測定する目的で、直径3mm、長径10mmのワックスロッドを作製し、その外側にフォイルを圧接し陶材溶着用パラジウム合金で鋳造したところ、両者は強固に鋳接されていた。次に、金属ロッドのフォイル面にオパーク陶材0.3mm、ボディー陶材2.7mm、合計3.0mm厚径、幅2.6mmに陶材を築盛・焼成と溶着強度を測定した結果、陶材溶着用

パラジウム合金とポーセレンとに匹敵するものであった。また臼歯部1歯欠損を想定した金型を用い、ブリッジを作製して破折強度を測定したところ110kgの数値を示した。

それらのことより、鋳接技法を用いブリッジの作製を行ったところ、十分に臨床に適應できるものとして、今回、その製作過程および臨床例を報告した。

**質 問** 荒木吉馬（歯科理工）

フレクソボンドシステムをブリッジに応用する場合、クラウンの場合よりも適合性の確保がむづかしくなると思われますが、それに対する技術的な要点を教えてください。

**回 答** 坂口邦彦（補綴II）

フォイルの厚径が40 $\mu$ mと厚いため、圧接はたしかに熟練を必要とする。しかし、プランジャーを用い精密に圧接できれば、その後の陶材築造焼成時の変形は、従来のものより少ない。